



表紙 仏花
石川 真樹 [茨城1組 福法寺]

花材 ヒバ、菊、トルコキキョウ、
葉ボタン、ヒペリカム、
モミの枝



Shinran
SS50th
SS00th

—〈2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ〉—

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2021年12月1日

編集 教化委員会広報・出版部門

『ネットワークナイン』班 編集員

総編集長：本田 彰一（東京1）

チーフ：中村 晃（茨城1）

佐々木誠信（東京4） 朝倉 俊隆（東京5） 五島 大地（東京8） 大山 信敬（茨城2）

チーフ：田上 翼（茨城1）

坂東 性悦（東京2） 平松 正宣（東京3） 櫻田 純（東京6） 秦 顕生（湘南）

チーフ：田宮 真人（東京8）

内藤 友樹（東京1） 渡邊 尚康（東京3） 相馬 法道（茨城1） 鞠川 卓史（湘南）

発行 真宗大谷派東京教区教化委員会

〒177-0032 練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館

TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net

ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

もくじ

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業

- | | | |
|---|-------------------------------|--------|
| ●03 | 団体参拝の願い | 蒲 信一 |
| | | 酒井 義一 |
| | | 白山 勝久 |
| | | 柴崎 光 |
| <small>特集 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十・立教開宗八百年</small> | | |
| ●05 | 慶讃法要の意義を学ぶ研修会 | 柴崎 光 |
| ●23 | 法語ポスター | |
| | <small>教区教化通信 総合調整総務会</small> | |
| ●24 | 教区報恩講 企画会だより | 旦保 広美 |
| | <small>教区教化通信 総合調整総務会</small> | |
| | 「伝道講習会」学習会 | |
| ●26 | 「業縁の会」 | 田澤 廣明 |
| | <small>教区教化通信 研修部門</small> | |
| ●28 | 聖典学習会 講義ノート | |
| | <small>教区教化通信 教学館</small> | |
| ●30 | 私の出遇った言葉 | 小田 俊彦 |
| | <small>教区教化通信 大谷保育協会</small> | |
| ●31 | 子育ての大地 | 塩原 智子 |
| | <small>はい！こちら真宗会館です</small> | |
| ●32 | 駐在日記 | 佐々木 弘明 |
| | <small>はい！こちら真宗会館です</small> | |
| ●33 | 所員のつぶやき | 海 未来 |
| ●35 | 敬弔・涌 | 鞠川 卓史 |



人と生まれたことの意味をたずねていこう

団体参拝部会の願い



教区慶讃事業企画運営委員・

団体参拝部会主査

蒲信一 (三浦組 浄栄寺)

私たち真宗大谷派の宗門は、2023年に「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」をお迎えます。この教区団体参拝に取り組むにあたっては、9月29日

たまたそれらのことを気に病んで、親鸞聖人の御前に参る気持ちが起こらないからでしょうか。反対に、もしコロナ禍がなく、何も気に病むことが無ければ、晴れ晴れとしてお参りすることができのでしょうか。私はそうではないと思います。私どもの心の中で、「親鸞聖人に人生を尋ね続けていく」という真宗門徒の根幹が消えかかっているからだと思います。

かつて私は亡くなられた和田^{わたしばし}稠先生の石川県大聖寺教区のご自坊に通わせていただきました。その時、一人のご門徒と知り合いました。その方は農業をしているのですが、和田師のお寺の座談会に遅れて来られてこう言われました。「今、村の寄合があったんやが、みんな口を開けば減反減反言うてる。そんな中で収穫を祝うなんておかしいやろ！こんなに矛盾することは無い。わしは今度農民奉仕団を結成してご本山にみんなでご参つて、親鸞聖人の前でとことん話し合おうと思おう」と。ビックリしました。これが北陸の真宗門徒かと。まさに一向一揆の末裔を感じました。この人たちは、人生の中で喜ぶにつけ悲しむにつけ、苦しむにつけ空しくなるにつけ、不安になるにつけ困窮するにつけ、

の団体参拝部会小委員会において、各組から出されていた団体参拝日程が決定し、そこから各組において団体参拝募集を始めていただくことになりました。この記事が『ネットワーク9』に掲載される頃には、どれだけの東京教区のご門徒が団体参拝に参加しようと思つてくださるか、気になるところです。

教区内からは、「コロナ禍でたいへんな情況なのに、団体参拝の募集など考えられない」「コロナ禍に加えて、寺離れや仏事離れで、慶讃法要どころではない」など悲観的な意見が聞こえてきました。

私たちは今、どうして親鸞聖人の慶讃法要の参拝に前向きになれないのでしょうか。コロナが蔓延しているからでしょうか。あるいはお寺の先行きが不透明だからでしょうか。は

そして豊かになるにつけて、すべてを親鸞聖人にご相談し、聞き開いてきたのだと感じました。

それに比べて私たちはどうでしょうか。世の中にコロナが蔓延しているから、お寺の収入が激減しているから、そういう理由で親鸞聖人の御前に出ることを拒んでいるように思われます。

何も問題がないから団体参拝に行くのではないのです。本願念仏の教えに遇い得た喜びを背負って団体参拝することは素晴らしいと思います。でも「どうしても教えに遇ったことが喜べないのです」「どうしても浄土真宗をいただくことができません」「教えが何の力にもならないのです」。そうした思いをひっさげて、親鸞聖人の御前に参拝することこそが、実は真宗門徒と言われた人々の生き様そのものでした。先述した北陸のご門徒は常にそうして生きてこられたと想像します。そうでなければ、「農民奉仕団云々」など口にするにはあり得ないからです。その言葉一つを聞いただけで、このご門徒にとつての親鸞聖人とは、「常に我とともにまします」存在であったことを、あれから二十年以上経った今、微塵にも疑うことはありません。

様々な困難を抱える現代社会、その中で教えをいただくことの意味を見失った私たちだからこそ、その空しさを抱えながら親鸞聖人の御前に参る意味があるのです。各組におかれましては、このことを共通の課題としていただき、親鸞聖人の慶讃法要に多くの方々がお参りしていただくことを願うばかりです。

今後の慶讃事業予定

・教区お待ち受け大会

— 東京教区500カ寺をつなぐ —

オンラインお待ち受け大会

【期 日】2022年6月13日(月)

13時30分〜

【開催方法】Youtubeでのライブ配信

【講師】池田 勇諦 氏

三重県桑名市 西恩寺 前任職

真宗大谷派学階「講師」

同朋大学名誉教授

※内容につきましては、あらためてご案内いたします。

みんなで付けよう!!

「慶讃バンド」

輪袈裟、畳袈裟、坊守章、肩衣に付けて慶讃法要を盛り上げよう!



「慶讃バンド」のPDFデータは東京教区ホームページよりダウンロードできます。どうぞご活用ください。



より一層の周知に資するため、慶讃バンドや着用している写真等を、「#慶讃バンド」を付けてSNSへ投稿をお願いいたします。

真宗大谷派 東京教区



慶讃法要の意義を学ぶ研修会

YouTube ライブ配信

2021年10月15日(金) 14:00～配信開始

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう



YouTube にてライブ配信を行います。
下記の URL または、QR コードからアクセスください。

<https://youtu.be/HrIWWG4tQt0>

- 14:00 開会
- 14:10 お話①慶讃法要の願いについて (酒井 義一氏)
- 14:35 お話②慶讃テーマについて (白山勝久氏)
- 15:00 お話③慶讃法要への想い (柴崎 光氏)
- 15:30 閉会

主催：慶讃事業企画運営委員会教化推進部会

あなたと共に慶讃法要をお迎えしたい!

2023年にお迎えする「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」。
そもそも「慶讃法要」って何? 「御誕生と立教開宗」、どうしてふたつの事柄が並んでいるの?
「慶讃法要の意義を学ぶ研修会」をとおして、慶讃法要と慶讃テーマに込められた想いをお話いたします。
あなたもわたしも、阿弥陀様からの呼び声をいただいている御同朋です。
YouTube 配信という画面越しではありますが、共に親鸞聖人の教えにふれましょう。

慶讃法要の

意義を学ぶ研修会

2021年10月15日、「慶讃法要の意義を学ぶ研修会」が各組の設置した会場、また個別の端末にて YouTube のライブ配信を視聴していただく形で実施されました。

一年半後の2023年春、「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」をお迎えするにあたって、慶讃法要の願いと慶讃法要テーマを皆様と共有し、研修会を通して、宗祖親鸞聖人の御誕生と立教開宗の意義を確かめ、各組・各寺院において、慶讃法要へ向けての機運が高まることを願って開催されました。

本号では、「教区慶讃法要企画運営委員会」の委員である酒井義一氏、白山勝久氏、柴崎光氏の研修会でのご講話を特集いたします。
人それぞれの受け取りがある中、ぜひ今一度3氏のお話を「一読いただき、ご一緒に慶讃法要の意義を学ぶ機縁としてまいります。」

慶讃法要の願い について

教区慶讃事業企画運営委員

「慶讃法要基本計画に関する委員会」会長代理

「教学・教化に関する小委員会」主査

酒井 義一氏（東京5組 存明寺）



こちらのお話は下記の
QRコードよりご視聴
いただけます。



◆この時代状況の中で

新型コロナウイルスという時代を迎えまして、今まで私たちが当たりまえにしてきたことが出来なくなつて長い時間が流れました。お寺に人々が集まつて教えを聞き、今の自らを語り、そして時には酒を酌み交わす。そのようなことが閉ざされて長い時間が経つたわけです。

「いったいこの先どうなるのだろうか…」。こんな不安も私の中にあります。そのような状況下で、私たちは慶讃法要をお迎えすることになりました。はたして、この慶讃法要にはどのような願いがあるのか。今日はそのことを表現してみたいと思います。

◆人と生まれて教えに出会う

かつて「宗務審議会」という会がありました。かつて「慶讃法要の基本計画を話し合つてまいりました。その中で「御誕生」ということに重きをおくのか、それとも「立教開宗」ということに重きをおくのか、どちらに重きをおくのかということが話し合われました。「もちろん立教開宗ではないか」という意見もあ

りましたし、「いや、宗祖の御誕生がなければ今の私たちはない」という意見もありました。しかし、最終的に確認したことは、「それぞれの側面はあるけれども、やはりこれはひとつのこととして受け止めていくべきであろう」ということでありました。

どういふことかと申しますと、宗祖が人間としてこの世に誕生した。そして、やがて自分では解くことの出来ない人生の様々な課題を担う。しかし、その課題を担うということがあつたからこそ、親鸞聖人は生涯の師匠である法然上人に出遇うということが成就しました。そして法然上人を通して、まさに「生きてはたらく浄土真宗の教え」に出遇うことが成り立つたのです。

この「人間として生まれ、教えに出遇う」ということが慶讃法要に込められている大きな願いではないかと思ひます。人と生まれて苦悩を抱く。しかしその苦悩を深い仏縁にして、温かな教えに出遇う。これは、親鸞聖人がそうであつたように、今まさに人間として生きている私たち一人ひとりが、どうか教えに出遇つて欲しい、と。これが慶讃法要に込められた大きな願いではないかと私は受け止めています。

◆御誕生について

「御誕生」、人間に生まれることを慶ぶとは、どういってお心なのでしょう。そのことを考えていくときに、私は最近、源信僧都の作と伝えられている『念仏法語(横川法語)』を味わっております。こんな言葉が出てまいります。

それ、一切衆生、三悪道をのがれて、人間に生まるる事、大なるよろこびなり。

『真宗聖典』961頁

一切の生きとし生けるものよ、地獄・餓鬼・畜生という三悪道をのがれて、人間に生まれることは大きなよろこびなのだ。こう言っております。しかし、私は長いことこの言葉の意味がよく理解できませんでした。

なぜ人間に生まれたことをよるこばなければならぬのか。人間に生まれれば思い通りにならないこともある、つらいことや悲しいこともあるではないか。しかし、この『念仏法語』このあとに言葉が続きます。そこを是非とも一緒に味わってみたいと思います。

世のすみうきはいとたよりなり。人かずならぬ身のいやしきは、菩提をねがうしるべなり。このゆえに、人間に生まるる事をよるこぶべし。

『真宗聖典』961頁

世の中にある、様々な生きにくさ。それがやがて、この世を厭うていくたよりになるのだと。そして、貧しさだとか濁り、愚かさはやがて、菩提を願う道標へと変化していくのだと。これが、『念仏法語』のお心ではないかと思えます。

人と生まれて解けない課題に出会う。ではその人生は駄目だったのかというと、そんなことはない。そのことが、大きなたよりとなり、そして、道標となつて、やがて菩提を願ひ、教えに出遇うという世界に通じていくのだということ、この言葉は私たちに呼びかけているのではないだろうか。

ですから、私が生まれたことを私がよるこぶという以前に、先を歩む方々から「人間に生まれたことをどうかよろこぶものであって欲しい」と、私たちはそのように願われ続けていく存在だということができると思います。

◆立教開宗について

次に、「立教開宗」ということについてですが、宗門では明治5(1872)年に、「祖師開宗年月元仁元年申正月」を立教開宗と定めています。元仁元年は親鸞聖人52歳の時にあたり、『真宗聖典』には「『教行信証』草稿本完成説あり。」と記載されています。

言うまでもないことですが、親鸞聖人の主著である『教行信証』は聖人が出遇われた、先を歩む方々の光の言葉に満ち満ちています。そしてその言葉を受けて、「誠に知りぬ」

「明らかに知りぬ」ということで、ご自身の解釈を述べておられます。つまり、親鸞聖人が浄土真宗を立てたという言い方ではなく、すでに人間界のあいだを脈々と流れていた浄土真宗という世界に親鸞聖人が出遇われた。これが立教開宗の中身ではないかと受け止めています。そのことをとても強く感じるのには、『教行信証』総序の御文です。これは、親鸞聖人の感動の言葉であります。

慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くこ

とを得たり。

『真宗聖典』150頁

この「慶ばしいかな」という表現は、『教行信証』には2カ所しか出てきません。総序と後序。その総序の「慶ばしいかな」とは、宗祖親鸞聖人は何を慶んでおられるのでしょうか。それは、「西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈」ですから、インド、アジア、中国、日本をとおして、まさに時を超え、場所を超えて私まで伝わってきた真の教え。その教えに、遇い難くしてやつと遇うことができた、聞きがたくしてやつと聞くことが出来た。そのことをただひたすら慶んでいる宗祖が、ここに生きておられると思います。

裏を返せば、宗祖も自分への呼び声として聞こえてこなかった時期があった。そして、なかなか出遇えなかった。しかし、そのような日々を経て、やつと聞くことが出来た。やつと出遇えた。このことを慶んでいる宗祖がいます。ここに私は「ほほえむ親鸞」がおられるのではないかということをおイメージしてみたいと思います。宗祖のお顔の多くは、厳しく一点を見つめているお顔が多いのですが、90年のご生涯、宗祖もほほえまれたこ

とがあつたと確信します。

特に「慶ばしいかな」と記されたこの時、宗祖は笑みをたたえながら、教えに出遇えたこと・言葉が聞こえたことを喜んだのではないのでしょうか。そんなことをイメージしています。

◆一人ひとりの慶讃法要

さて、慶讃法要についてですが、本山では2023年に行われます。そして、ここ東京教区では2025年の春に行われる予定です。私事ですが、私も自分のお寺で「門徒とともに慶讃法要をお勤めしたい」という思いを持っています。

曲がりなりにも浄土真宗に学んできた者の一人として、今までの学びを見つめ直し、新たな一步を踏み出す。そんな慶讃法要を私の法要としたいと思っています。

今年の4月に本山で開かれたお待ち受け大会での池田勇諦先生のご法話に、「もしも『私にとつて』という、この一点が抜け落ちると…」という言葉がありました。「私にとつて」ということが抜け落ちてしまえば、ご本山で大きな法要があるそうだからとそれを

見物に行く、ただの「見物人」になつてしまふのです。これは大変厳しいご指摘ですが、とても大切なご指摘であります。そこで、本当に私たちが大事にしたいことは、「一人ひとりの慶讃法要をお勤めする」という視点です。

一人ひとりが、人間としてこの世に生を受けた。そして今まで人生を歩む中で、もちろん愉快なことや楽しいこともあつたと思います。しかし、同時に時に苦しみ、悲しみ、生きづらさという苦悩を抱えたこともあるのではないのでしょうか。

しかしながら、そのような苦悩を「きつかけ」として、「深い仏縁」として、浄土真宗の教えに出遇っていく。そのことを私たちの生きざまとすべき時が、今やつてきているのではないのでしょうか。

◆居場所を求めて

昨日の新聞に、コロナの影響によって不登校になつた小中学生が19万人。そして自ら命を絶つていった小中高生が415人。これは昨年度の統計だそうです。いずれも過去最多ということでありました。自分の居場所を

どこにも見出せない。そして生きていく勇氣が持てないという現実。しかし、それは別の言い方をすれば、自分の居場所を今も真剣に求めている人たちがおられると。「生きていきたい」という、そういう心の叫びを叫び続けている人たちが、今この時代に生きていくということが言えるのだと思います。

これは、子どもたちのことだけでなく、私たち一人ひとりもそうなのではないでしょうか。居場所を求めて「生きていきたい」という心の叫びを抱える者。そのような一人に立ち返り、人間として生まれた私たちが苦悩というものを大きな手掛かりとして、人間を照らし続ける教えに出遇っていく者となる。これが、本当に私たちが大事にすべきことであると思います。

そして、その喜びを縁ある人と一緒に分かち合い、次の世代に「ここに道があるぞ」ということを示していく。それが慶讃法要という時ではないでしょうか。

◆新たな出発点として

慶讃法要は一つの到達点であります。準備をして到達していく。しかし、それは通過点

でもありません。ここで歩みが止まるはずがない通過点。さらに言えば、慶讃法要をきっかけにして新たな歩みを始めていく出発点でもあるのではないのでしょうか。

繰り返しになりますが、人と生まれ様々なるものを抱える私たち。しかし、その様々なるものを通して、厳しくも温かな、人間を照らし続ける教えに出遇ってきた。脈々と流れ続けるこの教えの歴史を、私たちの代で途切れさせてはなりません。

まさに、その教えに生き、その教えを表現し、人に伝え、ともに学んでいく。そのような歩みをしていく到達点であり、通過点であり、新たな出発点として、「一人ひとりの慶讃法要」をお迎えしたいと思います。



書 酒井 義一氏

◆本願に遇うために

最後になりますが、私に先んじて浄土真宗の教えを学び、浄土真宗の教えに生きている九州教区の調和晃磨先生のお言葉を一緒に味わってみたいと思います。その言葉とは、真宗大谷派の教師修練において、これからこの教団を担っていく若い方々に、調先生が本当に「説法獅子吼」するかのよう語り掛けた一言であります。

あなたがこの世に生まれ、生きているのは、阿弥陀様の本願に遇うためですよ。

一体、なぜ生まれたのか。何をしに生まれできたのか。このような問いに対して先生はすでにご本願に出遇った者として、「あなたがこの世に生まれ、生きているのは、阿弥陀様の本願に遇うため」だと。この言葉は、私にはとても強く響いてまいりました。

慶讃法要を迎える願い。それは「一人ひとりが本願に出遇う」「宗祖の歩みに重なるようにして、本願に出遇う」ということ。この一点を忘れずに、慶讃法要へ向けての歩みをもとにしていききたいと思います。(了)

慶讃テーマ

について

教区慶讃事業企画運営委員

「慶讃法要テーマに関する教学委員会」委員

白山 勝久氏（東京5組 西蓮寺）



こちらのお話は下記の
QRコードよりご視聴
いただけます。



◆テーマ委員としての葛藤

私は慶讃テーマ策定のための委員会に委員の一人として携わらせていただきました。今回の慶讃テーマを紡ぎ出すにあたり、ご門徒2名と、寺の者が私を含めて4名、計6名が「テーマ委員」としてご本山よりお声掛けをいただきました。2018年9月から2019年3月までの半年余りの間に10回の会合を重ね、今回のテーマと出会うに至りました。本日は、テーマ委員会で話し合われたことも含めて、今回の慶讃テーマについてのお話をさせていただきます。

第一回委員会の際、私たち委員の中では「どのような言葉が生み出されていくのだろう」といった、期待よりも不安と困惑した気持ちが強くなりました。なぜなら50年前の慶讃法要の際、『生まれた意義と生きる喜びを見つけよう』というスローガンが掲げられ、ご本山の築地塀にも長きに亘って掲示されてきました。この言葉を大切なより所として歩まれてきた方がたくさんいます。テーマ委員のお役を引き受けてからも、そういうお声をたくさんお聞きしました。

ですから私たちには、先のスローガンに替

わる新しいテーマを作り出せるのだろうかという不安と、そもそも別のテーマを生み出していいのだろうかという思いがありました。

◆お念仏とともにいただいていたのだろうか

そのような思いから出発した委員会でしたが、今回、テーマ委員会の主査をお務めいただいた京都教区の金松俊一かなまつしゅんいちさんは、50年前の慶讃法要のスローガンが発信された経緯や背景をご存知の方で、この50年間、そのスローガンをより所としてこられました。その金松さんが第一回目のテーマ委員会で次のように語られました。「私は50年前のスローガンを大切に生きてきました。この度、2023年の慶讃法要をお迎えするにあたり、その歩みを振り返ってみると、はたして私は『生まれた意義と生きる喜びを見つけよう』というスローガンを、お念仏とともにいただいていたであろうか」と。

「あろうか」ということは、「お念仏とともにいただいていたのではなかったのだろうか」という反省が含まれている言葉だと思えます。真宗大谷派が世間に発信するメッセージ

ジですから、表面に表れる言葉だけではなく、その背景には、お念仏や親鸞聖人の教えがなければいけません。しかし、言葉だけを受け止めて、お念仏の教えと切り離してはこなかったらどうかという反省を金松さんは語られました。それはあくまでも金松さんご自身の反省、懺悔としての話ですが、そのことは、50年前のスローガンに出あった一人ひとりと言えることではないでしょうか。

「本山の扉に掲げられてきた『生まれた意義と生きる喜びを見つけよう』という言葉をお念仏とともに、親鸞聖人の教えとともにいただいてきたであろうか。そのことは、今回のテーマ『南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう』にも言えることです。お念仏を大切にしたい、お念仏を伝えるていきたい。それが慶讃法要をお迎えすることの意味ではないか。そのことをしっかりと根っこに持って、堂々とお念仏を発信していこうということが委員会では確かめられました。

◆「人と生まれたことの意味」を尋ねられて

50年前のスローガンに「生まれた意義」「生きる喜び」という言葉がありました。今回

のテーマにも「生まれたことの意味」という奇しくも似たようなニュアンスの表現があります。この「生まれた意義」や「生きる喜び」、「人と生まれたことの意味をたずねていこう」ということについて、少し考えてみたいと思います。

たとえば、「あなたの生まれた意義は何ですか?」「あなたの生まれた意味は何ですか?」「どうして生まれてきたと思いますか?」「尋ねられたとします。お一人お一人の中で、ちょっと考えてみてください。

(考える時間)



そのように問い尋ねられたとき、自分個人の生まれた意義や意味のことを、多くの方が思ったのではないのでしょうか。しかし、ひとつ大事にしたことがあります。テーマの中に「人と生まれた」という言葉が出てきます。現代ではもしかしたら「ん?」と思われた方もいるかもしれません。「どうして、人間と

して生まれたか」に「しなかつたんですか?」という質問をいただいたこともあります。

この「人と生まれた」という表現は、親鸞聖人の言葉を引用させていただいたものです。親鸞聖人は「人間」という言葉に対して「ひととうまるるをいふ」と左訓、親鸞聖人なりのご領解を記されています。「人間」というのは、「ひととうまるるをいふ」んだと親鸞聖人は確かめをされています。人として生まれるということは、私個人、単体としての話ではありません。人間の「間」という字は、「関係性を生きている」ということを表しています。ですから、「人と生まれる」ということは、そこに同時に関係性も生まれているわけです。

先ほど、「あなたの生まれた意義は?」「あなたの生まれた意味は?」とお尋ねした後に「自分個人の生まれた意義や意味を思いませんでしたか?」と言いましたが、「人と生まれる」とは、私個人のことではなくて、「人とともにある私であったのだなあ」ということを受け止めていくことだと思えます。

そういう想いから、「人と生まれたことの意味をたずねていこう」という言葉に辿り着きました。

◆居場所の喪失

先の酒井義一さんのお話の中に、「現代の人たちは居場所がなくて困っている」というお話がありました。「居場所」とは、実在としての居場所の他に、「精神的な心のより所」という意味での居場所もありますが、現代の人たちは、そういう居場所、より所となるものを見失い、それゆえに困っているのではないかとのお話であったかと思えます。この問題については、委員会においても話し合われました。テーマを紡ぎ出すにあたり、「現代とはどのような時代だろうか？」と議論したときに出て来たキーワードが「居場所の喪失」でした。

「私はここに居ていいのだろうか？」「何のために生まれてきたのだろうか？」という喪失感や不安定な気持ちを、現代に生きる多くの人々が抱えているのではないかとということ、委員会では話し合っていました。そういう喪失感に対して、お念仏、親鸞聖人の教えをいただいている私たちにとつては、阿弥陀如来から慈悲のおこころをいただいています。私たち一人ひとりが、阿弥陀さまから衆生（すべての生きとし生けるもの）を救

うという慈悲のおこころをいただいております。そのおこころに応えて、私たちは「南無阿弥陀仏」とお念仏を申すわけですから、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すその場所が、苦しみも悲しみもあつても、私の生きる場所となる、生きる場所であるということが確かめられていく。それが「南無阿弥陀仏」のお念仏ではないかということも、委員会で話し合われました。

◆関係を生きていくということ

先ほど「関係を生きていく」とお話ししました。そのような話をする、「人と人が関係を紡ぐことは大事ですね」「人間関係を大切にしなければいけませんね」と受け止められたり、あるいは「南無阿弥陀仏とお念仏申す門徒どうし、手を取り合って仲良くしているに違いない」というように思われたりします。

しかし、そういうことを訴えようとしているわけではありません。人と人が関係を紡ぐということは、手と手を取り合って助け合い、支え合う側面もあります。でも、憎み合い、蔑み合い、いのちを奪い合いながら生きて

いるという現実もあります。私たちは喜びや嬉しいことを求め、悲しみや苦しみを排除しようとして「どうか我が身には起こらないで欲しい」と思いがちです。ですが、人と人が関係を持つて生きていくということは、喜びもあり悲しみもあるものです。

我が身に起こる悲しみを考えるときに、「どうして私はこんなに悲しい思いをしなければならぬのだろうか？」「どうしてこのような苦しみを味わわなければいけないのだろうか？」と思います。けれども、関係を生きていくということは、自分にはそのつもりはなくても、私が為した（な）ことによって他者を、あなたを苦しめている、悲しい思いをさせているということもあるわけです。そのことは、気づかずに、「悲しみよなくなれ」というのは、どこか関係性を欠落させているのではないかと思えます。

「悲しみ」「悲しみ」と言って申し訳ありません。しかし、関係性を持つているからこそ、喜びだけではなく悲しみも含まれたいのちを生きていく。そのことを忘れてはならない。そのために「南無阿弥陀仏」のお念仏が私たち一人ひとりに与えられている。阿弥陀さまの慈悲に照らされている。そのことを伝えた

くて、「南無阿弥陀仏」のお念仏を大事にお伝えしていただくという話を話し合いました。

◆御誕生と立教開宗とは

テーマ委員のお話をいただいてから最初の委員会の日までに一カ月半ほど時間がありました。自分の中で「御誕生、立教開宗とはどういうことなのだろう？」ということを確認してから委員会に臨みました。

人間親鸞（わざと呼び捨てにさせていただきます）が誕生しただけでは、当然お念仏も教えもありません。親鸞自身が成長し、比叡山に入り、比叡山での仏道の学びがあり、そして山を下りられ、法然上人と出遇われ、お念仏と出遇われました。そして法然上人の教え、お念仏を大事にされた親鸞が「南無阿弥陀仏」と称え、法然上人が説かれた念仏の教えを口にされました。しかし、それでもまだ「言葉」に過ぎません。どういうことかと言いますと、親鸞が口にされていることを、「ああ、この人の言っていることは大事だなあ。この人のお姿を真似して、南無阿弥陀仏とお念仏申してみよう」と思った人びとがいて、そこで初めて親鸞が語られた言葉、記された

言葉が「教え」となるのではないのでしょうか。

そのように考えたとき、人間として誕生したそのときだけが「御誕生」ということではなく、親鸞の教えを大事だなあと聞く人びと、親鸞の称えるお念仏を私も申してみようと思つた人びと、そういう方々がいて、親鸞の言葉が教えとなりました。そこで初めて「宗祖としての親鸞聖人」が誕生したといえるのではないのでしょうか。当然、親鸞聖人にしてみれば「宗祖」という意識は全くなかったことですから、教えを聞く者にとつて、宗祖としての親鸞聖人がそこに誕生し、お念仏の教えも誕生したわけです。御誕生と立教開宗がなされたわけです。

そのように想うと、「御誕生」と「立教開宗」というのは、2つの出来事を「おめでとございませう」「ありがとうございます」と褒めたためたための法要ではないことに思い至りました。人間親鸞が生まれ、苦悩を経たお念仏に出遇われた。親鸞自身がお念仏を申す身になられたことよつて、お念仏を申される人びとが生まれました。そういうことすべてが「御誕生・立教開宗」に含まれることです。

つまり、親鸞聖人個人の身に起きたことを慶讃するのではなく、親鸞聖人を縁としてお

念仏の教えをいただいたということに気づく場が慶讃法要なのだと思います。

親鸞聖人の言葉を聞き、お念仏申された人びとがいたおかげで、現代に至るまでお念仏が伝わり、私たちもお念仏を申すことが出来ます。今、私たちが教えにふれ、「南無阿弥陀仏」とお念仏申したならば、また次の世代へとお念仏が伝わっていきます。そのことがまた親鸞聖人の教えに、お念仏に還っていくこととなります。

そういう大きな循環・大きな輪の中に、親鸞聖人も私も、そして皆さんもともにいるのです。阿弥陀如来も含めて。そのような大きな循環、大きな輪の中にあることを確かめるのが慶讃法要なのだという想いを持ってテーマ委員会に臨みました。（次頁へ）



◆お念仏という種

そのような想いから「種から芽が出て花が咲き、花は枯れても種が残りまた花を咲かすように」という言葉が浮かびました。

お念仏という種から芽が出て、多くの人がびとが「南無阿弥陀仏」とお念仏申すようになった。そして、一人ひとりのいのちは終えていくけれども、お念仏申す人がいたおかげでまた次の人へとお念仏が伝わっていく。一人ひとりのいのちは、やがて終えていくものかもしれない。でもお念仏というものは、このようにして、ずっと伝わっていくものである。私がお念仏申すことによって次の世代、次の人にも伝わっていきます。

慶讃法要をお勤めするということは、「種から芽が出て花が咲き、花は枯れても種が残りまた花を咲かすように」、いのちの循環とでもいうのでしょうか、お念仏が私にまで伝わったということ、お念仏が次に伝わっていくということを表しているものであると思います。そういうことも含めて、『南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう』というテーマを、皆さんお一人お一人に受け止めていただけたらと思います。(了)

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう

【テーマの願い】

私は、「この地、この時に生を受けている。このことを精いっぱい生きていく。」

悩み、苦しみは私に押し寄せてくる。

でもそれは「生きる」と「生かす」を奪うものではない。

私の心の奥底にある「生きたい」という声に耳を澄ます。

その時、私に届けられている声に気づく。

それは私を呼ぶ声、

南無阿弥陀仏。

仏の名（みな）を呼ぶことは、仏の呼び声を聞くこと。

その呼び声の響きの中で、

人と生まれたことの意味を仏にたずねていこう。

私に先立って生きてきた人たちと、

同じ今を生きる人たちと、

これから生まれてくる人たちと、

そのこと一つをともにたずねていこう。

種から芽が出て花が咲き、花は枯れても種が残りまた花を咲かすように。

(慶讃法要特設ホームページより)

※ 白山氏がお話の中で触れられた、上記【テーマの願い】は写真とテロップを用いたイメージ映像も公開しております。右のQRコードよりYouTubeにてご視聴いただけます。



慶讃法要への想い

教区慶讃事業企画運営委員
教区門徒会長

柴崎 光氏（茨城1組 一乗寺）



こちらのお話は下記のQRコードよりご視聴いただけます。



◆慶讃法要への想いを問う

今皆さんは、慶讃法要に向けてどのような想いを抱かれていますでしょうか。

「慶讃法要って何?」「どんなことをするのか?」という疑問や、「コロナ禍のこんな時に法要なんて出来るの?」という少々後ろ向きなお気持ちを抱かれている方もいらっしゃるかも知れません。また、「今回の慶讃法要ではどんなことが出来るのだろうか?」「どのようなご縁が生まれるのだろうか?」と前向きなお気持ちの方もいらっしゃると思います。

私自身はどうだろうと、この研修会を迎えるにあたって改めて見つめ直してみますと、「自分の本当の気持ちや想いは、なかなか自分では掴めないものだ」というのが正直なところではあります。

もちろん、今は教区門徒会長の任を拝命している身でありますから、慶讃法要の機運を高めていこうという想いを抱いていることは確かなのですが、コロナ禍での開催に対する不安や、今後想定される責務に対するプレッシャーなど、色々な想いがありませんでいるのが今の私の内面状態であります。

“自分自身に問いかけていく”こと。これ

は私が今までご法話などを通して教えていただいた大切なことの一つです。皆さんも自分自身に聞いてみることで、一人ひとりの「慶讃法要に対する想い」を明らかにしていっていただければと思います。

◆大きな節目

私の生まれ故郷は四国の愛媛県というところではあります。先日ノーベル物理学賞を受賞された眞鍋淑郎氏まなべしゅくろうも同じ愛媛県のご出身です。『毎日新聞』の記事に、眞鍋氏の「好奇心が原動力」という言葉が紹介されました。私も最初に、人間の特徴ともいえるこの「好奇心」を持つて、まずはこれまで真宗大谷派の大規模な法要がどのくらいの間隔で厳修ごんしゅうされてきたのかを、皆さんと一緒に振り返ってみたいと思います。

前回の「宗祖親鸞聖人御誕生八百年・立教開宗七百五十年慶讃法要」（1973年）から「蓮如上人五百回御遠忌法要」（1998年）までの間が25年。その13年後に「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」（2011年）が厳修され、そこから再来年お迎えする慶讃法要までが12年という間隔です。

つまり、前回の慶讃法要から今回の慶讃法要までの50年間で、大きな法要は全部で4つということになります。そして、この慶讃法要の次に控えている大規模な法要となると、25年後の「蓮如上人五百五十回御遠忌法要」(2048年)です。

このように数少ない大きな節目であるという点においても、今回の慶讃法要が多くの方々にとって重要な機縁であることは間違いないのではないのでしょうか。

◆親鸞聖人に関する「なぜ？」

ところで、皆さんは親鸞聖人について、どのような疑問を抱かれたことはありませんか。「なぜ法然上人を善き人と仰がれたのか?」「なぜ七高僧を大切にされたのか?」「なぜお念仏を称える教えを選ばれたのか?」…。これらのことに関しては、本当に色々なところに色々な情報があります。もちろん「正信偈」そのものが親鸞聖人のお考えを記されたものですし、真宗大谷派のホームページにもこれらの答えを導く事柄が掲載されています。

少し前までの私は、そういった知識を頭で

理解してわかった気になっていましたが、ある日のご法話で「自力」と「他力」についてのお話をお聞きしている時に、ふと「知識からわかつた気になっているのは、もしかしたら典型的な『自力』の在り方なんじゃないだろうか?」と思ったのです。『三帰依文』に「仏法聞き難し」という言葉がありますが、まさに私のそれまでの在り方は「仏法聞き難し」ならぬ「仏法聞き流し」だったのでは、と思ひ至りました。

いくら色々なお話をお聞きして頭で理解しても、実際の自分の生活に反映されていなければ、それは「ただ聞いただけ」のこと。未だに、聞かせていただいた教えを生活にまで反映できていないことが多い私であります。多分、一生そのように思いつながらも、少しでも仏法を聞くことのできる人間になればと思っております。

私はこの気づきを大切にし、今後も「好奇心」を持って色々なことに疑問を抱いていきたいと思ひます。慶讃法要はそのような私に多くの縁を運んでできてくれるものではないかと非常に楽しみにしています。

◆苦悩の有情

慶讃法要についての特設ページ『慶讃テーマとその願い』には「正像末和讃」の37首目に出てくる「苦悩の有情」という言葉が記述されています。

如来の作願をたづぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

〔真宗聖典〕503頁

この「苦悩の有情」という言葉をインターネットで検索してみたところ、真宗大谷派のホームページに掲載されている但馬弘前宗務総長の「2021年 ご挨拶」に、「苦悩の有情、今を尽くす」という題名の文章が綴られているのを見つけました。

私が但馬氏に最後にお会いしたのは、わずか3カ月前の7月8日のことです。その前日に逝去された高橋義人東京教区前門徒会長のお訃報をお伝えし、会議の場にてお話をいただくためでした。私たちはこの3カ月という短い期間に、宗門にとって大切なお二人を亡

くした訳です。お二人のお浄土での活躍を願っております。

さて、但馬氏はその挨拶文で、2011年に厳修された「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が東日本大震災という未曾有の災害が発生した直後の法要であったことに触れ、被災された多くの方々を想いながら、その中で念仏申すことで法要を勤めてきたということを振り返っております。

そして、今回の慶讃法要をコロナ禍という状況下でお迎えすることについて、「悲しみを生きる力とするものこそ南無阿弥陀仏の道であり、無碍の一道と言われる所以です。それは人間回復の道でもあります」と締めくくっております。

「苦悩の有情」という言葉で更に調べてみると、『しんらん交流館たより』の第6号にも『苦悩と大悲』という藤原千佳子氏のご法話の記事に、先ほどの和讃が出てきました。藤原氏は「我々一人ひとりの苦悩を縁として、仏さまの大悲心が成就してくださるのです」とまとめておられます。

つまり、苦しい時・大変な時だからこそ、我々一人ひとりが教えに向き合い、念仏申すことで、仏さまの大悲心がおはたらきになる

のだということが示されているのではないのでしょうか。

また、この藤原氏の記事の中に、「方向が転じられる」というお話が出てきます。ご本人のお許しもいただいていないので誠に恐縮ですが、この場をお借りして一部を抜粋して朗読させていただき、皆さんにご紹介したいと思います。

何にも間に合わないお手上げのところにご回向の南無阿弥陀仏の呼びかけをいただくと、不思議に方向が変わるのです。現実が変わるのではないのです。我々は幸せを求めています。悲しいことに出遭わないように、苦しいことに遭わないようにと願っております。

宗教のほとんどが向こうに対象があつて、病気になるように、ひどい目に遭わないように、仕事があまくいきますように、こちらから願いがけをしますね。でも、親鸞聖人の教えをいただく方向が反対です。真実の方からこの我々に呼びかけてください。

『しんらん交流館たより』第6号 24頁

私はこの記事の内容に、とても感銘を受けました。大変な苦勞をして、悲しい事柄に出遭われ、そういった中でも仏さまの教えに出会い、「方向が転じられ」て生きている方がおられる。コロナ禍という、厳しい状況にすべての人が向き合っている今は、だからこそ仏さまの教えに出会い、「方向が転じられる」おはたらきに出遇える時なのかも知れません。(次頁へ)

The image shows a screenshot of the website for 'shinran' magazine. The top part features the magazine cover for issue 6, dated March 1, 2021, with the title 'たより' (Letter) and a winter scene illustration. Below the cover, there is a section for subscription information, including a QR code and a link to the subscription page. The text mentions that the magazine is available for free to members of the Shinran Exchange Center and provides details on how to subscribe, including a QR code for the subscription page and a link to the magazine's website.

「真宗教化センター しんらん交流館」ホームページではこれまでに発行されてきた『しんらん交流館たより』が全文読めるようアーカイブされている

◆「人と生まれた」にかけられた願い

慶讃法要のテーマにある「人と生まれた」との意味をたずねていこう」の言葉について、特設ページには次のように書かれています。

「人と生まれた」ということを大切にしました。

生きる意味をたずねていくだけでは、自分が納得できる「意味」探しになります。私たちの方から意味をつかもうとするとき、そこには優劣に基づいた価値の有無が生まれてきます。一方で、「人と生まれた」という言葉が表すのは、老病死するのいのであり、誰とも代わってもらおうことのできないのちです。そして他との関係性の中にあるいのちです。そのことをいのちの事実から教えられます。

親鸞聖人は「人間」という言葉に「ひとつまるとまるるをいふ」と左訓されています。親鸞聖人も、聖人の教えにふれた人びとも人として生まれたのは、関係性を生きる者として生まれたということであると教えたくださっています。その教えをいただくならば、生まれた意義と生きる喜びは、他

者（ひと）との関係性において見いだされます。自分ひとりの救いではなく、他者ともなる救いの発見があるのです。人と生まれた意味をたずねるといことは、南無阿弥陀仏によって呼び覚まされる関係を生きるということです。両手を合わせ南無阿弥陀仏と申すその中に、どれほど多くの縁があることか、どれほどの罪業があることか。そのことをたずねていくことです。

（慶讃法要特設ページ「テーマの趣旨」）

どうやら、「私が人として生まれたことこの個人的な意味をたずねる」ということではないようです。

慶讃法要のリーフレットには、真宗大谷派教学研究所の楠信生くすのきしんしやう所長が、「悲しみや苦しみの連続であっても、そのことが人生を決定づけるものではない。仏の本願に出遇うことで、この世に誕生した意味に目覚め、人生をいただくことが始まる。私たち一人ひとりの誕生の意味を、親鸞聖人の御誕生から考えることである」と記されています。

また、大谷大学の一楽真いちらくまこと先生は、「自分が何のために生まれてきたのか。何をするためにここに居るのか。これは誰もが問わずにお

れない問いである。（中略）世間の価値づけを超えた世界に目覚めて生きよ、この呼びかけを聞くことから始まる生き方がある。それを親鸞聖人は教えてくださっている」と述べておられます。

◆同じ物差し

私たちはいつも、必ず自分の「物差し」を心のどこかに置いてしまっています。しかもこの物差しは、一人ひとり違うのです。私を生んでくれた両親とでさえ、違っていたんだなと思いきこされることが多々あります。妻や子どもたちと違っているのは当然のことです。しかし私は、家族はもちろんのことで、これまでご縁があった方々との関係性の中で生きてきましたし、これからも生きていきます。

親鸞聖人が法然上人と出遇われ、教えを賜たまわったことは、ある意味で「同じ物差し」をいただかれたということでしょう。一人ひとりの物差しが違うことを互いに認め合った上で、「同じ物差し」に共感する。我々真宗門徒にとつて、仏の本願に出遇い念仏申させていただくことこそが、人と生まれた我が身の

意味を考えることなのではないでしょうか。
私にこの物差しをなくすことは出来ませんが、「人と生まれたことの意味」について、そんな物差しを持つている自分であることを認めた上で、たずねていこうと思います。

◆慶讃法要を「縁とし、新しい世界へ

私はこの慶讃法要を「縁として、今までのご縁とこれからのご縁を大切にしていけたらと思っております。親鸞聖人がお誕生になり、法然上人をはじめとした七高僧、そして阿弥陀様にまで脈々とつながる「縁を慶び、聖人がお著し（し）になった『教行信証』によって後世の方々がその教えを我々にまで正しく伝えてくださった。

そのことをお慶びして、一楽先生がリーフレットに記しておられた、「〃世間の価値づけを超えた世界に目覚めて生きよ〃、この呼びかけを聞くことから始まる」という、その生き方を自分の生活の中に反映させることが出来るように、努めてまいりたいと思っております。(一)

※本記事の作成にあたり、編集したものを3名の各講師から「確認いただきました。動画と異なる部分もありますがご了承下さい。」



法要リーフレット vol.1



法要リーフレット vol.2

※柴崎氏がお話の中で触れられた右記のリーフレット等、慶讃法要に関連する様々な情報が掲載された特設ページは、左下のQRコードよりお手持ちの端末などでご覧いただけますので是非ご活用ください！



【編集員所感】

私はこの研修会に参加することが出来て、本当によかったと感じている。なぜならば、恥ずかしながら私自身がこれまで慶讃法要をお迎えする心構えというものを、ほとんど持ち合わせていなかったからだ。

講師のお三方からは、別々の講題でありながらも、全体の内容を通して「私にとって〃

という大切な課題を与えていただいた。それは、この研修会さえ、文字通り「取材対象」として対象化してしまう私の在り方そのものを、「主体はどこにあるのか?」と問い直してくれる視座であった。

『南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう』この慶讃テーマを、私の手前勝手な意味づけを超えた、深いところで噛み締めて味わいつつ、来年6月13日(月)に開催される「教区慶讃法要お待ち受け大会」へ向けた歩みを始めたい。

(取材・田宮班)



―慶讃法要の意義を学ぶ研修会―

サテライトの

現場から



今回の「慶讃法要の意義を学ぶ研修会」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の目的からYouTubeでのライブ配信にて開催されました。しかし各個人が自宅で視聴するだけでなく、教区内の多くの組や寺院において、いわゆる「サテライト」（インターネット配信を特定の会場に人数を限定して参集し、視聴する形式）でも実施されました。その会場となった2カ寺からご感想を寄せていただきましたので、ここに紹介致します。

研修会にサテライト形式で参加して

川崎組 稱名寺 本多 暁

前年度から書面や文章伝道のみとなっていた組門徒会の事業ですが、今回、総会をZoomにて行い、その後門徒会研修として、「慶

讃法要の意義を学ぶ研修会」を視聴することになりました。門徒会員さんにはお寺ごとかもしくは3箇所ほどのサテライト会場寺院に分かれて参加していただきました。

久しぶりに他寺のご門徒に直接お会いしたり、画面越しにお声を聞けたり、またこの状況下でなかなか現実味を見出せていなかった慶讃法要について組内で共有する、よいきっかけとなりました。

一人でパソコンの前が続く中、このような形を取ってみますと、オンラインで少人数ではありますが、ご本尊の前で、一緒に聴聞する方々が頷いたりする、ちよつとした仕草を感じながら、場をとものにできたなあと感じます。これを契機に自分にとつての慶讃法要を大切に考えていこうと思います。

昨年より何度か、自坊で本山のライブ配信などをご門徒と視聴することもしてきました。自分では見ることができないので、お寺さんで準備していただいていたので、お寺というお声もあり、機会があれば今後も続けていこうと思っています。

機材のプロジェクトは、本山から出ているDVDを見たり、花まつりで絵本を大きく映写しながら読み聞かせをするなど、以前よ

り行事日程の一部で使っていました。テレビの方が明るいと見やすいですが、プロジェクトは、移動が簡単なことと、使わない時は片付けやすいところが利点だと思います。



▲ 組門徒会総会の様子

▶ 終了後、引き続き組門徒会研修として今回の研修会に参加し、慶讃法要の意義を確かめた





左が丸山さん（浄龍寺ご門徒）
 アクセスしやすい会場で、会に
 参加できることはサテライト
 の大きな利点のひとつである

サテライト形式の感想
 長野5組 専念寺 藤井 義信

10月15日、長野5組専念寺をサテライト会場として、YouTubeにてライブ配信された「慶讃法要の意義を学ぶ研修会」を組門徒会副会長の丸山徹三さんと拝聴しました。

以前であれば、このような形で拝聴できるとは思いませんでした。丸山さんは体調が万全ではありませんでしたので心配しましたが、会場が近いということでお越しいただいて一緒に拝聴することができました。真宗会館へは片道4時間ほどかかるので、ご門徒さんとのように「慶讃法要」について「自分事」として拝聴し、「私にとつての意義」を今後一緒に考えられる機会をいただけたことは、大変ありがたいことだと感じました。



今回は拝聴後の座談は出来ませんでした
 が、サテライトであればまだ良いかなと思っ
 点は、ご講師は居られません。視聴後に座
 談が出来ることだと思います。今はコロナ感
 染症もあり難しい部分ではありますが、サテ
 ライト視聴は座談も行なつて初めて意味を
 なすと思います。

最善はやはりご講師と拝聴者が顔を合わ
 せたところで拝聴し、お互いの思いを語り合
 うことがお念仏の相続につながるのだと思
 います。ありがとうございました。

合掌

予告 教区慶讃法要お待ち受け大会

2022年6月13日(月)

会場：ライブ配信

講師：池田 勇諦氏（三重教区 西恩寺）
 真宗大谷派講師 同朋大学名誉教授

「東京教区500カ寺をつなぐ オンラインお待ち受け大会」

「慶讚法要・慶讚テーマ」のポスターが

東京教区ホームページ「暮らしにじいーん」から

ダウンロードできます!!

真宗大谷派（京都・東本願寺）

2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讚法要

テーマ

『南無阿弥陀仏』

人と生まれたことの意味を

たずねていこう

法要期間

- 〔第一期法要〕2023年3月25日～4月8日
- 〔讚仰期間〕2023年4月9日～4月14日
- 〔第二期法要〕2023年4月15日～4月29日



↑テーマの趣旨・願いについてはこちらをご覧ください。

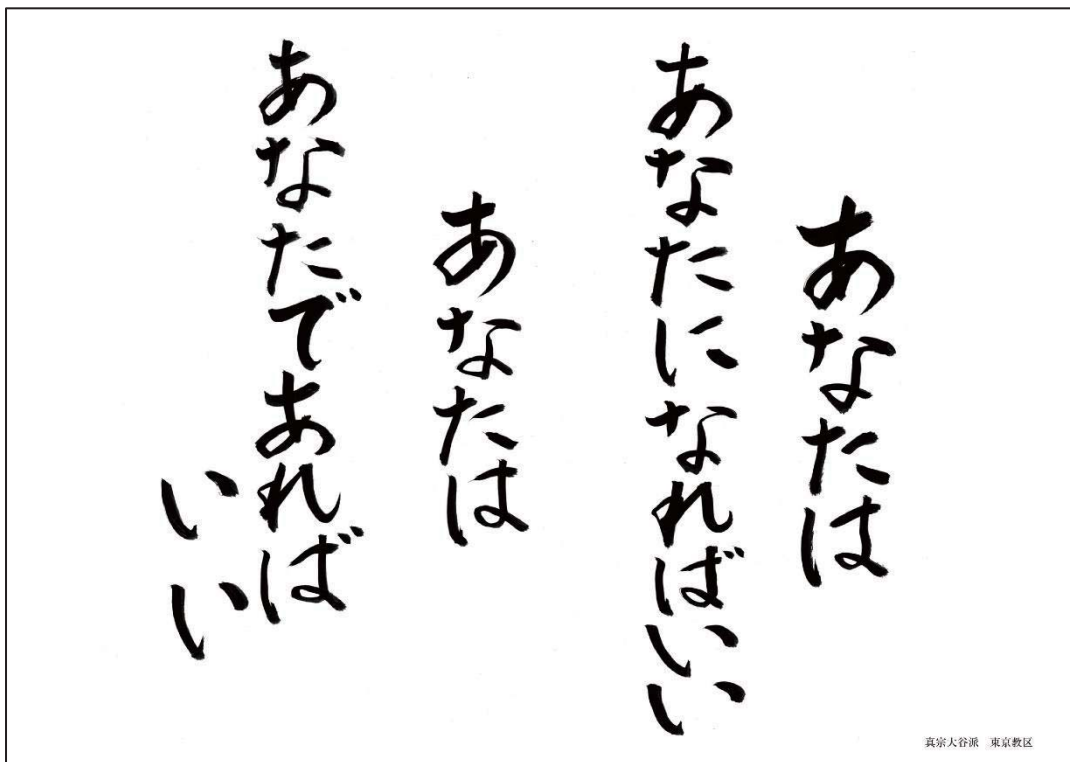
The 850th Celebration of Shinran Shōnin's Birth and the 800th Anniversary of the Establishment of Jōdo Shinshū

Theme

**Namu Amida Butsu
To Discover the Meaning of Being
Born as Human Beings**

東京教区で作成しました「慶讚法要・慶讚テーマ」のポスターが東京教区ホームページ「暮らしにじいーん」からダウンロードできます。ダウンロードしていただければ、ご寺院、ご自宅のプリンターでお好みのサイズに印刷できます。縦長サイズですの
で、掲示板のちよっとしたスペースに掲示いただくなど、ぜひご活用ください。

今月の法語



書：佐藤 多仙

- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。

教区教化通信 総合調整総務会

教区報恩講 企画会だより

教区報恩講企画会 実行委員 日保 広美（東京7組 宗泉寺 坊守）

2022年 教区報恩講 テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」

サブテーマ 「であいから問われて」



10月に入り、感染者数がかなり減ってきた。この1年半ほどは、特にあつという間に過ぎ去ってしまったと思う。

企画会の一員となり、今回の報恩講は三度目のお迎えとなる。1年目の報恩講を終え、2年目の準備からはリモート会議となった。それまでは毎月真宗会館や企画会のお寺に集まり、密な会議を重ねていた。リモート会議

は初めての経験で、パソコンの操作にも慣れず、画面越しではどこに向かって、誰に向かって、何を話しているのか、何を話したいのかよくわからない。自分の存在も相手の存在も不確かな感じがした。何より、企画会のみんなで一緒に報恩講をつくりあげていく感じが非常に薄くなった気がした。

ご存じのように、2021年の報恩講は、緊急事態宣言下、オンラインでライブ配信となった。企画会委員も各々自坊や自宅からの参拝となり、私はひとり寂しくパソコンの前に座った。前年のように、寒い中朝早くから真宗会館に行くこともなく、手足が凍えることもない。雪の降る中、雪が屋根からドサドサ落ちる音を聞きながら真宗会館に宿泊することもなかった。反省会であがった「次はど

うしよう」「あれはこうしたいね」などのたくさんの方の検討事項もどこかに消えてしまったようだ。画面の向こうに映像で流れてくる報恩講は遠く、気持ち的にも距離を感じてしまった。お参りはしたものの、お参りしたつもりで終わったかもしれない。今回もほとんど対面で集まることができずに、リモートで準備が進められている。

昨年の教区報恩講では、お手次のお寺に門徒さんが集まり、何人かが一緒に視聴参拝していただいた報告が数件あった。一人でパソコンの前で参詣するのと、人が隣にいて参詣、聴聞するのでは大きな違いがあるように思う。小さなことかもしれないがオンライン化が進む中、お寺単位での視聴参拝を推奨していきたいということが企画会でも意見に挙がっていた。

今回が3年間の任期最後の報恩講となるが、企画会に入れていただき様々な「であい」を頂戴した。このコロナ禍での出来事も、お念仏の教えの中に私の貴重な「であい」と受け止め、今回は主体的にお参りしたいと思う。またいつか真宗会館にたくさんの方が集い、一緒にお念仏できる報恩講が戻ってきたら嬉しく思う。

主催：真宗大谷派 東京教区

#今年もオンラインで報恩講

東京教区

報 恩 講

～であいから問われて～

YouTube でライブ配信！

パソコンやスマートフォンからお参り下さい

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

2022年 1月28日 金

13:20 配信開始
13:30 開会 (真宗宗歌)
13:40 勤行
14:30 感話 (加藤 元氏 / 東京7組順正寺)
14:40 法話 (海 法龍氏 / 三浦組長願寺)
16:00 閉会 (恩徳讃)

今年度も東京教区報恩講はインターネット (YouTube) にてライブ配信を行います。念珠を準備していただき、ご聴聞下さい。真宗会館に参詣していただくことはできません。

真宗大谷派東本願寺 真宗会館 (東京教務所) TEL/03-5393-0810 FAX/03-5393-0814
〒177-0032 東京都練馬区台原1-3-7 mail/tokyo@higashihonganji.or.jp HP/http://www.ji-n.net/

※教区報恩講は、例年1月26日の帰敬式、27日、28日の一昼夜にて厳修してまいりました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、昨年度同様にオンラインにて厳修することが決定いたしました。

お寺に集まっても東京教区報恩講を一緒に勤めませんか

上記チラシの通り、来年の東京教区報恩講は「YouTubeライブ」による配信を行います。オンライン配信ということ、どこからでも東京教区報恩講にお参りすることが出来ます。しかしながら、パソコンやスマホ、タブレットをお持ちでない方、また不慣れな方は参加することが難しいという方もあります。そこでお寺などを会場として集まっていた、スクリーンやテレビなどのモニターに映像を映して、皆さんと一緒に東京教区報恩講をお勤めしてはいかがでしょう。これまで東京教区報恩講に参詣できなかった方が参加できるチャンスですし、また法話終了後に座談会や茶話会を行ってもいいかもしれません。どうぞ皆さんの発想で新しい取り組みが生まれることを願っています。

※お寺などに集まる場合は、お手次の寺院・教会の住職と相談の上「3密」を避け、感染拡大防止への取り組みをお願い致します。

教区教化通信 総合調整総務会

「伝道講習会」学習会 「業縁の会」

「業縁の会」は、伝道講習会修了者の継続的な学びの場として、毎年開催されている学習会であり、道場長に本多雅人氏（東京2組蓮光寺住職）、講師に松井憲一氏（元大谷大学非常勤講師）をお迎えし、『歎異抄』異義編について学びを深めています。

昨年度は、新型コロナウイルスの影響により、オンライン会議形式での開催となりましたが、今年度は、10月4日・5日の2日間、亘り、感染対策を徹底し、東京2組蓮光寺様を会場として開催しました。



「伝道講習会」学習会に参加して

東京2組 専念寺 田澤 廣明

「東京教区伝道講習会」学習会「業縁の会」は、『歎異抄』異義編をテキストに、松井憲一先生から講義をいただいています。本年度は『歎異抄』の第十四章と第十五章について学びました。

第十四章は、念仏は滅罪の利益ということに對しての異義を取り上げます。どこまでも自我を立て、自力で罪を消すことができると思い、念仏を免罪符、罪滅ぼしの手段とする私たちに、その罪の深さをしらせています。自らの罪を消し去ることではなく、生きていくことそれ自体が罪の身であると気づかせるのが念仏のはたらき。講義の中で、「大悲は非を非とするはたらきであるが、私たちは非を是とする愚かさを生きている」という言葉が印象に残っています。

第十五章は、煩惱の身のままに即身成仏するということへの異義を取り上げます。聖道門でいう「さとり」は凡夫が仏になっていく道とはほど遠い難行ですが、親鸞聖人にとつての「すくい」とは信を得ることです。いつでも自我にとらわれる身が、無意識下に頭が下がったときに出遇う世界、選別も排除もしない、念仏の道が開かれていくと教えられます。

学習会後に、以前の「業縁の会」で第十五章を学んだ際のノートを見返していると、「真宗には入門はあるけど卒業はない、だからいつまでも念仏することができるといいう松井先生の言葉がメモに残っていました。その時その時は学んだつもりになってすぐに忘れていってしまう私だからこそ、この学びの場の中で、お聖教に立ち返って繰り返し聞法することの大切さを改めて教えられていると思います。

◆ 今後の予定 ◆

伝道講習会修了者研修


期日 2022年5月24日～26日

場所 宮田屋旅館（群馬県）

※詳細は改めてご案内いたします。


NEW

「**掲示伝道ポスター**」



ミニ

ポストカード



2017年度 A・B (2種類)
2018年度 A・B (2種類)
2019年度 A・B (2種類)

■各100円
各6枚入
簡易スタンド付き
はがきサイズ
送料250円
(場合によって500円)

東京教区教化委員会広報出版部門では、毎年掲示板に掲示いただくための「掲示伝道用ポスター」を発行しております。

このたび、生活の中でより身近に言葉に触れていただけるように、**ポストカードサイズ**の「**掲示伝道用ポスターミニ**」を発行いたしました！

ご寺院での行事の際に、ご門徒への記念としていかがでしょうか？

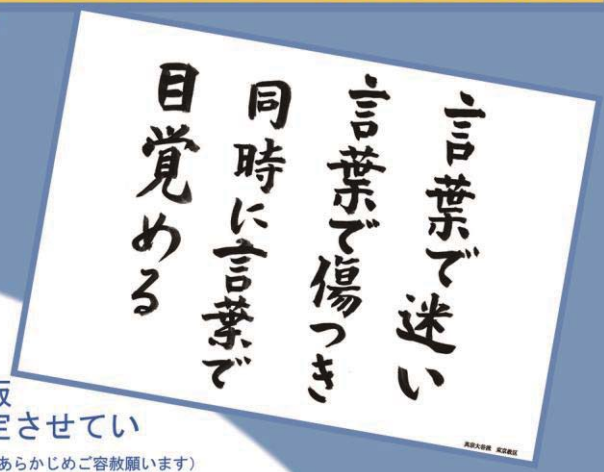
お申込み：東京教務所 (TEL03-5393-0810/担当:海) まで

このたび、東京教区の「掲示伝道ポスター」作成にあたり、広く掲示用の言葉を募集いたします。

つきましては、教区の皆様に対し、普段の生活を通して心に残る言葉がございましたら、是非、ご紹介賜りたく募集いたします。

「**掲示伝道ポスター**」

言葉を大募集



募集要項

概要：応募いただいた言葉の中から東京教区教化委員会・広報出版部門で法語ポスターとして選定させていただきます。(選定されない場合があることをあらかじめご容赦願います)

募集：所定の用紙でFAX、郵送にてご応募ください

締切：2022年2月11日(金)

※ご不明な点は東京教務所 TEL03-5393-0810 (担当：佐々木・大橋) まで

教区教化通信 研修部門

聖典学習会 「正信偈」に学ぶ

講師：一楽 真 氏（大谷大学教授）

道綽決聖道難証

唯明浄土可通入

万善自力貶勤修

円満徳号勸専称

三不三信誨慇懃

像末法滅同悲引

一生造悪値弘誓

至安養界証妙果

(書き下し文)

道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。

万善の自力、勤修を貶す。

円満の徳号、専称を勧む。

三不三信の誨、慇懃にして、

像末法滅、同じく悲引す。

一生悪を造れども、弘誓に値いぬれば、安養界に至りて妙果を証せしむと、いえり。

■ 一生造悪値弘誓

「一生悪を造れども、弘誓に値いぬれば」は、三不三信の信心ということが内容なわけです。本願に値うという、これが信心の実際ですよ。何かを信じ込むということではなくて、こういう世界があったのかという目覚めと言つてもいいと思います。逆に言えば今まで知らずに生きていた。知らないから別のものを確かだと思いついて握って生きていたわけですが、本願に値うところに本当ではなかったということが知らされる。ここに道が開けるわけです。

下品下生のところに着目するのが道綽禪師で、それを受けて善導大師がこの下品下生の救いということを『観経疏』で明らかにしていきます。上品から下品まで見れば人間をランク付けているようにも見えますが、これは出遇った縁の違いだということを善導ははっ

きり言います。遇縁、縁の違いです。能力資質に違いがあるように見えますが、何に出遇ったかということなのです。だから上品の人は仏道の行を成していく、そういう縁に遇った人です。逆に言えばこの下品の人は今まで善を成すという縁に遇わなかったということであつて、人間として上か下かという話をしていくわけではありません。だから九品を通して救われるということをお願いするのが『観経』の主眼です。下品下生も漏れないということが釈尊の一番言いたいことなのです。

このことを言うために善導は、散善は韋提希が求めていないのに説いたという意味で、散善は仏の自説である。あるいは要求されていないのに自ら開かれたので、仏目開といわれます。これは善導のお仕事でありますけれども、そのものが全部道綽のところに出ているわけがあります。ここを踏まえて称名念仏ということが言われるわけです。

「下品下生」というのは、あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十悪を作る。もろもろの不善を具せるかくのごとき愚人、悪業をもつてのゆえに悪道に墮すべし。

(聖典一二〇頁)
とあります。今まで不善業である五逆十悪を

作って生きてきたというわけです。そういう五逆十悪という「不善を具せるかくのごときの人」が、これがおもしろいですね。悪を作ったのだから悪人と書いてもよさそうですが、悪人なのです。本人は一生懸命生きていますけれども、傷つけ合うというふうな事になっていく。これは私たちのことですよ。それが今まで作ってきた業の結果、いよいよ苦しめられる悪道に落ちていくことは間違いないということ。「悪道に墮すべし」と言っている。

ここに初めて仏法を教えてください。善知識との出会いがあります。

ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。(同頁)

阿弥陀仏を念じなさいと。この場合の念仏は、心を落ち着けて心に仏を思い浮かべることの意味です。それはなぜか。次を読んだらわかります。

この人、苦に逼められて念仏するに違(いとま)あらず。(同頁)

苦しみが迫ってきたと、逼迫してありますので、心を落ち着けて念仏するといふ余裕がないのです。これを「念仏するに違」がないと書いています。そうしたらその善知識が善き友

となつて、

善友告げて言わく、「汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」と。(同頁)

ここで称名ということが出るわけです。これを道綽が「称我名字」という本願文に読み取っているわけです。

この称名念仏は善導から始まったと思いがちですが、実は十八願文の「至信心樂」を外して「称我名字」と読んだのはこの道綽だということ。ここが非常に大事なところだと思います。その称名というのは、決して音を出すという話ではない。喉をやられて声が出なくなったら念仏できないのかと、それは違います。南無阿弥陀仏と称えなさいというのは、いつでもどこでもできるということ。形にあらわしたものです。極端な話、口の中でも称えられます。だから、心を落ち着けてということ。間合わない状況でも、「南無阿弥陀仏」と称えることは、誰でもどこでもできるということ。「称すべし」と言われているのです。そこに阿弥陀との出会いがある。

これが「正信偈」のお言葉では「一生造悪値弘誓」と、本願に値うという、一人も漏らさないという弘い誓いにお値いするという、そこに繋がっているわけです。(中略)これは

称えるというところに我々は言葉を通して阿弥陀の世界に触れていくことが起こります。もちろん初めは「それは何ですか」と隣にいる善知識、善き友に聞くかもしれません。でも、そこには善知識、ここに善き友が隣におられます。「阿弥陀さんはあなたの人生に良し悪しは言いません。どんな死に方をするか、それに優劣は付けません。それが阿弥陀さんです。どんな者をも迎えてくれます」と。これは阿弥陀という言葉を初めて聞いたところから、阿弥陀の世界に出遇っていくということがある。こういうことは一々書いていませんけれども、称えさせたということは阿弥陀に出遇うということが中身としてあるわけです。それを親鸞聖人は「一生造悪値弘誓」とおさえてくださっていると思うのです。(文責 研修部門)

今後の聖典学習会の日程

2022年

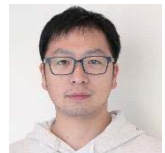
- 2月15日(火) 13時～17時
- 4月11日(月) 13時～17時
- 6月6日(月) 13時～17時

※お申込み・お問い合わせについては、東京教務所(担当: 渡邊楽)まで

教区教化通信 教学館

私が出遇った言葉

茨城1組 等覺寺 小田 俊彦



学びほどく

『パリナーマ』の原稿を書くため、主に専修学院時代の資料を渉猟したのだが、それ以降当時のことをよく思い出さなくなった。当時といっても十年にも満たない程度のことではあるが、初心にかえるような機会をいただいた。近づきたくもないと思っていた宗教の世界に、よもや私が僧侶となった不思議な事実に対する葛藤。その頑なに拒んできた環境や自分自身の思いを打ち破ったのは専修学院での生活そのものだったのだが、そこにいることが本当に嫌だったのも専修学院での生活でもあった。

さて、今回の特別講義は教学研究所の名和達宣氏を招いて講義が行われた。講義の冒頭で鶴見俊輔氏の著書『かくれ佛教』から、筆者がヘレン・ケラーから話しかけられた言葉

を講師は紹介された。その中に unlearn という言葉が出てくる。様々な辞書を見ると「学んだことを捨てる」などのような意味になるのだが、そうではなく「学びほどく」という意味でヘレン・ケラーは言ったのではないかと筆者は捉えたようだ。

確かに学ぶだけでは自分の知識として得るだけで、本当の学びとは生活の中で実践していくことが重要なのではないかと思った。しかし、ほどけるほどに学ばなければ、ほどきようもないのもまた事実ではないかとも思った。それは専修学院を卒業し、再び日常生活に追われて学びを置き去りにしていかかという感覚を呼び起こし、さらには小学校時代に担任に言われた「一生勉強ですよ」の言葉を思い出し、今も私の中で叫び続けて

いるのだが、それでも何か言い訳をしてなかなか動かないのもまた私なのである。

私自身、なにか「型」が形成されていると言えるほど習熟したものがあるとは思えない。しかし、私が経験・体験してきたことを元に現在の私の「型」があるともいえるのだろう。この unlearn という言葉との出会いは、私の「型」に対する「これでいいのか」という問いかけなのではないだろうか。過去の私をなかつたことにはできないし、今の生活も私の選びだ。西田先生が言われていた「自分の真宗で死ぬるか」のお言葉と、この unlearn の言葉に共通のものを感じた。その呼びかけに対して私は学びほどいていく生活を送らねばならない。

第26回 教学館月例研修会(オンライン開催)

2021年10月6日〜7日

基調講義…『歎異抄論』

「『歎異抄』蓮如非禁書説の提唱」

西田 眞因 氏(元教学研究所有長)

特別講義…『現代と親鸞教学』

名和 達宣 氏(教学研究所有員)



「受け継がれていくもの」

慈光保育園は創設50周年を迎えました。未満児専門の保育園としてスタートし、50年を節目に4・5歳児クラスを導入し、就学まで過ごすことのできる保育園へと転換しました。未満児だけを預かる保育が一般的ではなかった50年前、理事長が「小さいのに預けられてかわいそう」と言われたい保育園を作ってわが子を預けたいと設立しました。



女性の就労が当たり前となった今日、0歳から保育所に預けることに後ろめたさを感じるお母さんは少ないかもしれません。しかし50年前は、子どもに“申し訳ない”という気持ちを抱きながらも働かざるを得なかった女性が預けていたのです。

そんな母親たちが、「預けて良かった・預けてもこの子はかわいそうじゃなかった」と思える保育を心がけてきました。怪我をさせないで預かった時のままお返しするだけの保育ではなく、その日その子が一日「幸せ!」「楽しかった」と思え、ご両親が笑顔になれる保育に努めてきました。

4・5歳児クラスを導入した現在もその精神を受け継いで子どもたち一人一人の「幸せ!」「楽しい」を大切にしながら、子どもと共に生活を営んでいます。

未満児専門の頃は「我慢させている」と思う親御さんは、時間のある時は目いっぱい子どもと関わり、穴埋めしようと努力されます。そんな親子の関係が素敵でした。

保育ニーズが多様化し、保育の現場も時々苦しくなってしまうこともありますが、五代目園長として、保育園の役割と家庭の役割が、互いに関連しあって子育てが成立していく、そんなあり方をこれからもしっかり受け継いでいきたいと改めて感じています。

社会福祉法人 慈光福祉会
慈光保育園
(長野県飯田市)
園長 塩原 智子



はい！こちら真宗会館です

駐	在
日	記



駐在からひとこと

写真：長野3組 推進員養成講座（第3回）

東京教区駐在教導

佐々木 弘明

＜新鮮な体験＞

「ウッ！起き上がれない・・・」

さかのぼること数時間前、休日に外を歩いているとき、腰に違和感があったので、家に帰り、横になって休んでいた。しばらくして立とうとすると、腰に激痛が走り、起き上がることができなくなった。ギックリ腰だ。

次の週の火曜日から2泊3日（山梨県・長野県→上記写真）での出張を控えていたので、あと2日でなんとか動けるようにならなければならないと、翌日、真宗会館職員御用達の接骨院で治療をもらった。

その夜、テレビドラマを見ていると、40歳代の女性が、みかんの箱を持ったときに、「グキッ！」とギックリ腰になるシーンがあった。普段であれば、笑うシーンなのだろうが、自分も同じ状況なので、笑うに笑えなかった。

以前も、くしゃみをしてギックリ腰になったことがあったが、今回のよう

に痛みが長引かなかったように記憶している。年齢を重ねるごとに、自分の体の機能は衰えていく。自分より年下のスポーツ選手が活躍している場面を見ると、「これから体を鍛えても、年齢的にも、体力的にも、自分は、もうあの選手と同じ舞台に立つことはできないんだろうな」などと考えてしまう。

ある方が、「老いる」とは、「老入る」であって、「老いという新しい状態に入る」ことだと仰っていたことを思い出した。「老い」というと、どうしてもマイナスのことばかり考えてしまいがちだが、体が衰えていく中での体験は、これまで体験しようとしてもできなかったことであり、初めての体験なので、新鮮なことなんだと受け止めることができるということである。

出張を無事に終え、腰の痛みを抱えながらこの原稿を執筆しているのだが、自分にとって新しい、新鮮な体験だとは、なかなか受け止められない。

はい！こちら真宗会館です



首都圏教化推進本部
教区職員
海 未来



担当：出版書籍等

好きな食べ物：アイスコーヒー・ぶっかけうどん

幼少期は図画工作のようなものが好きであったが、振り返ってみると物をつくったり、絵を描いたりすることがほとんどなくなってしまった。そういう方も多いのではないだろうか。先日、『月刊同朋』の11月号に「子どもの絵ってなぜすごい？」という特集が組まれており、児童教化関連の担当の役回りとして絵を描く課題が出されていることもあって、なにか参考にならないかと思い読んでみた。掲載されている子どもたちの描いた絵を見ると、大胆な構図や描いているものに対する色づかいに、ワクワクするような楽しさが感じられた。勝手な見方かもしれないが私から見ると上手いとか下手の基準を超えた表現であり、とても見ごたえがあった。

幼少期の自分を思い出しても、クレヨンを塗りたいくったり、色を混ぜたりすることによる色味の変化や自分なりの発見をその当時は楽しんでいただと思う。また周りに自分の表現・発見したものが受け入れられる環境・教育があるというのが大切であり、だからこそ幼稚園や小学校の美術の時間などで何かをつくる機会が設けられているのかなとも思った。何をするにしても自分なりに興味を持って楽しんでいく力は大切なものである。

今、白い紙を渡されて好きに何か描いてごらんと言われても私はしり込みしてしまうかもしれないが、一度向き合うことで自分なりの発見をしていければ、絵を描くことを楽しめるかもしれない。作品の出来は別にしただが。

教区の情報をおあなたに あなたの声を教区に!!

一緒にネットワーク9を作りませんか?

編集員募集中!!

Network 9

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

取材、原稿執筆、校正、デザインなど、紙面作りに関するすべてを行います。お寺の新聞やチラシを作る時のスキルも学べるかもしれません。パソコン初心者の方でも大歓迎です。先輩編集員が丁寧にご指導します。一緒に楽しいネットワーク9を作っていきましょう。興味がある方、お問合せは東京教務所（担当：佐々木）まで

ネットワーク9へのご意見・ご感想をお寄せください
〒177-0032 東京都練馬区谷原1-3-7 東本願寺真宗会館内 東京教務所
【電話】(03)5393-0810 【ファックス】(03)5393-0814
【mail】nw9@ji-n.net



スマホやパソコンでぜひアクセスを! 東京教区のホームページ

暮らしに
じいーん



www.ji-n.net

検索 暮らしにじいーん

お寺をもっと身近に

多彩なコンテンツ

- じいーん散歩 **New**
- しんらんさまめぐり
- 法話/行事・講座
- なるほど仏事作法
- 寺院検索
- 他

じいーんのお寺も載っています!



スタッフ募集

パソコン技術は不要です

ホームページ班のメンバーは僧侶に限らず、月に約1回のペースで集い、アイデアを出し合ったり、時には現地取材もしています。ぜひ一緒に活動しませんか? (お問合せは教務所/立野まで)



敬弔

坂上 幸子 様

茨城1組 應順寺 前坊守
10月24日命終 86歳

生前のご功勞を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

10月末日届出迄

涌ゆう

編集員の随筆



「生きていることのなつかしさに、ふと、胸が熱くなる…」詩人・吉野弘さんの「祝婚歌」の一節です。先日、法事のお話でこの詩の一節を使おうと思い、詩の内容を読み返していたら、その表現に胸を衝かれました。

本号で「慶讃法要の意義を学ぶ研修会」を特集に取り上げることになり、それでは真宗会館に講師の写真撮影に行こうかと思いましたが。しかし、コロナ禍で「無理をしなくても…」と総編集長殿が撮影を代任してくださるとのこと。その気遣いに甘え、久々の真宗会館行きは見送ろうという気になっていたところに駐在さんからの電話。「是非来てください。そろそろ真宗会館が恋しくなった頃でしょ?」『ネットワーク9』の取材枠があるので)と外出が出来ない悶々とした私の気持ちを察した誘い文句に、真宗会館行きの気持ちが開花しました。

久々の真宗会館で、懐かしい(大袈裟かも

しれませんが…)面々と言葉を交わし、ひと喜び。ご講師のお話を聴聞し、もうひと喜び。この2年間、勝手知ったる人との会話も、ライブでの法話聴聞も遠ざかっていたので、郷愁も相まってか、胸の奥より温かさがじわじわと湧いてきました。

研修会ではご講師より「様々な生きにくさは、この世を厭うていくたよりに、愚かさは菩提を願う道標へとやがて変化していく」、また、「関係性を持つているからこそ、喜びだけではなく悲しみも含まれたいのちを生きる」というお話をいただきました。

人との関係によって得る温もりは有難いです。しかし、作者の意図とは違うかもしれませんが、悲しみや迷いを持ち合わせながらも、いのちを歩ませようとする願いに触れるということが冒頭の「生きていることのなつかしさ」なのではないかと感慨に耽っていた法事の5分前でした。(湘南組 正恩寺 鞠川 卓史)